

想うはあなた一人

柏葉いづみ

北海道・二〇・大学生

「もう愛なんてないのに。わからないのかなあ？」私に言われたような気がして、とても切なくて悲しかった。あなたが彼女とうまくいっていない事は聞いていたし、嫌な事を思い出させるのは嫌だから何も聞けなかった。でも、私はいつもあなたと彼女の事が気になっていた。

初めて逢ったあの日、私はあなたに恋をした。彼女がいる事がわかっていても、あなただけを見て、わき目もふらず追いかけた。結ばれる事のない恋だとわかっていても、あなたを想わずにはいられなかったから。あなたにとって私は、ペットのような存在だったと思う。だから、ほんの一瞬でも気まぐれでも、あなたが私を恋人のように扱ってくれるのはとても嬉しかった。逢えるのは毎週火曜日の夕方だけ。それだけでも十分幸せ。抱きしめてくれる時にあなたから香る石鹸の匂いが好き。首筋や髪の毛にしてくれるキスが好き。私はあなたの腕の中で、子供ではなく大人の女性へと変化した。私にはもうあなたしか見えないから、「他に良い人はたくさんいるよ」なんて言わないで。「一時的

なものだよ」なんて言われても、本当にあなたしか見えないのに。あなたが思っているよりも、私のもっともつとあなたを想っているのに。

どれくらい「愛してる」と言えば、どれほど想っているかを伝えられるのだろうか？彼女があなたをどれだけ愛しているか知らないけれど、私の方があなたを愛していると思う。あなたが彼女と別れるかもしれないと言った時、本当は嬉しかった。そう思った瞬間、私は自分がとても嫌な女だと思った。彼女にはあなたしかいない。でも、私にもあなたしかいないから、私はあなたを諦めない。

「もし、彼女と別れても君とは一緒にならないよ」と言われたけれど、想うだけなら自由なもの。あなたの考えが変わるまで私はずっと待つつもりです。

*十歳以上も上の人に恋をしました。報われない恋だとわかっていても、この想いを受けとめてくれた彼に、ほんの少しだけ期待しています。